

昭和53年度県営園場整備地域  
埋蔵文化財調査報告 3

## 安芸郡安濃町・北浦遺跡



北浦遺跡位置図（国土地理院 1:25000 標本）

1979・3

三重県教育委員会

## I 前 言

三重県教育委員会文化課においては、毎年度当初に県庁内の各開発関係部課に対し事業計画を照会し、遺跡台帳照合やバトロールを実施し計画地内の埋蔵文化財保護に対処している。

県農林水産部耕地第二課に対しても昭和53年4月7日に照会し、その回答を5月9日にえた。そのうち、県営圃場整備事業計画の秋季施工個所である安濃川右岸地区計画地内の埋蔵文化財分布調査を10月下旬に行ない、引き続き重機による試掘調査の結果、同地区内の安濃町大字田端上野字北浦地内に奈良時代の遺物散布地の所在を確認した。この結果により、耕地第二課、津耕地事務所と遺跡保存を前提とした協議を重ねたが、遺跡を乗せる台地を横断する基幹用水路管理設工事が既に着工していることと、地元土地改良区からの台地削平の強い要望のあることなど、台地の削平土砂による周辺部水田、道路敷のかさ上げ工事計画等々により、やむなく昭和53年11月24日から基幹用水路建設計画地を含む畠地約500m<sup>2</sup>を対象とした緊急調査を実施した。

発掘調査の進行に伴い、全城に竪穴住居址、掘立柱建物址が検出されたため、その東側に続く畠地にも遺構の存在が確実となった。そのため引き続き調査と併行して協議を続け、最終的には台地のほぼ半分の約2,400m<sup>2</sup>について発掘調査対象とし、翌昭和54年1月11日に終了した。

なお、本調査に当って津耕地事務所の安濃川右岸担当係には地元土地改良区、施工業者との接洽、現況図面・航空写真的提供に便宜をいただいたほか、田端上野地区の方々の絶大な協力をえた。ここに記して謝意を表するものである。



## II 位置・地形

津市の北西郊の安濃町を南流する一級河川安濃川は、鈴鹿山脈の南端に源を発し、標高820mの経ヶ峰の山頂からその東麓部を蛇行して津市域から伊勢湾に注いでいる。そのうち安濃町域では、両岸に東西約1.5kmの沖積平野を形成している。

北浦遺跡は、安濃川右岸の標高約29mの河岸段丘上に位置し、行政上は安芸郡安濃町大字田端上野字北浦に属している。遺跡を乗せる台地は東方に突き出しており、東西約200m、南北約80mで、現状は畠地と一部に果樹が植わり、周辺の水田面との比高は約5mである。台地の北・東側の崖面は旧安濃川の氾濫に浸食されて急傾斜をなし、南側は若干緩やかになっている。遺跡面は北から南と西から東へ向う緩斜面を呈している。

当遺跡は、これまで田端上野D遺跡（県遺跡番号4415、町同番号371）と登録されていた古墳時代以降の遺物包含地であったが、今後は北浦遺跡と改称したい。さて、当遺跡の北西約500mには、5世紀中葉造営の双方中方墳である明合古墳（国史跡指定）が所在し、多くの遺跡も所在している。安濃川流域には当遺跡の南方約6kmに弥生時代の大集落である納所遺跡をはじめ、亀井遺跡、清水西遺跡など同川左岸と東方の美濃屋川の自然堤防上にいくつかの弥生時代集落があり、そのうち、縄文時代に遡るものは、辻の内遺跡（1）、納所遺跡で若干の晩期の土器が出土するのみである。弥生時代の小規模な集落遺跡は、以上のはか多門遺跡（2）、馬屋町遺跡（3）、田端上



遺跡地形図（1:6000）

野A遺跡(4)、川西遺跡(5)、北端遺跡(6)、柳垣内遺跡(7)がある。これらはほとんど古墳時代にも継続し、同時代の集落遺跡も大塚A遺跡(8)、田端上野B・C遺跡(9・10)、八幡前遺跡(11)があり、安濃川左岸一帯にも同様の散布地が点在するが、同川右岸の台地低位面の遺跡群はその背後に後期群集墳が比較的集中する傾向が認められる。現在のところ前期古墳は未確認であるが、中期・後期のものとして明合古墳(12)、大名塚古墳(13)、岡南4号墳(14)、日余2号墳(15)のはか、上述の集落遺跡を基盤として小規模な後期の群集墳(点線)が所在し、栗加古墳群(16)は北浦遺跡に最も近い横穴式石室群である。奈良時代以降の集落遺跡の調査例は皆無であり実態は不明であるが、八幡前遺跡は室町時代に至ることが表面採集資料で判明するにすぎず、他に数ヶ所の中世城館址が確認されているのみである。



遺跡近景（西より）

### III 北浦遺跡の調査

#### 1. 遺構

調査に併行して台地北側の土砂採掘が進められたことと、調査地区の東部に果樹、植木があるため調査は地域的に限られたが、弥生時代後期の方形竪穴住居址1棟、古墳時代終末期の横穴式石室1基(北浦1号墳)、西部では奈良時代方形竪穴住居址6棟、奈良時代～平安時代掘立柱建物址7棟、西部と中央部では鎌倉～室町時代火葬墓3基と土塙1基のはか時期不明の溝址1個所を地山の黄褐色砂質土層上面で確認した。なお、北浦1号墳についてはⅣにまとめた。

##### (1) 弥生時代後期の遺構

###### 竪穴住居址

S B 1 調査地区的東端で確認したもので、東西5.0m、南北4.9mの方形を呈し、周縁部に幅約30cm、深さ約10cmのU字溝がめぐる。東側隅部は後世の擾乱を受けているが、当初は溝が連続していたものであろう。この周溝は住居址の南側隅部からほぼ直線的に南側斜面に続き約12mまでを確認した。周縁部の掘り方上面と床面の比高は約10cmで、埋土は黒褐色砂質土の単純層で、遺物の包含量はすくない。床面はほぼ平坦で柱穴は全く認められず、床面に密着して土器片が散在するが特に一定部分に集中した出土状態ではなく、焼土・木炭などの集積もみられない。なお、床面から約5～10cm浮いた状態で9個の河原石が出土したが、住居址に伴なったものは不明である。南側隅部の周溝を切り込んで、径26cm、深さ15cmの円形ピットがあるが、埋土は周溝と同様の黒褐色砂質土で、僅かに炭化物を含むほか、土器片が若干出土しているので貯蔵坑であろう。

##### (2) 奈良～平安時代の遺構

###### 竪穴住居址

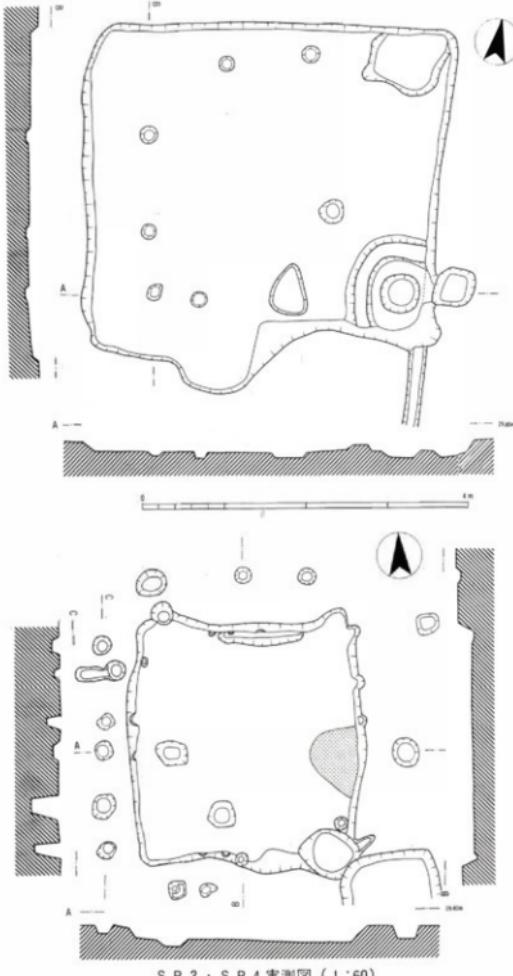
S B 2 東西4.6m、南北約3.7～4.1mの方形を呈し、掘り方は12cmである。南辺の中央部では、長さ約1m、幅50cmほどの弧状をなしており出入口の施設と推定され、東南隅部から南側に向う幅約20cm、深さ約5～10cmのU字状の排水溝を長さ約4mまで確認した。床面は北から南に向って緩傾斜し、直径10～15cm、深さ4～10cmの柱穴8個を確認したが柱筋は一定しない。床面の東北隅と東南隅に貯蔵坑と推定される深さ約10cmのピットがあるが、東南隅のものはその内側に逆L字状に地山を削り出した上幅約7cm、下幅約15cm、高さ約6cmの帯状の周堤があり、周堤と壁面に囲まれた中央に直径約25cm、深さ約10cmの円形ピットがある。ピット内には土師器胴長甕の底部破片がまとめて出土したが、木炭や焼土は無く食物・水などを貯蔵する土塙と推定され、周堤は雨水などの浸入防止のために設けられたものであろう。なお、床面には木炭・焼土の集積は全くなく、僅かに東北隅のピットに木炭が若干出土しているのみである。なお、埋土の黒褐色砂質土に土師器、須恵器片が混在し、床面に密着した遺物はみられない。

S B 3 S B 1 の南西3.5mで全体の約半分を確認した。北辺がややいびつな方形を呈するものと推定され、南北4.3m、掘り方は5～10cmである。床面は南に緩傾斜し、直径約15～20cm、深さ約

15cmの円形柱穴6個を検出したが柱筋は一定しない。東辺の北側に長さ1.6m、幅約1mの張り出しが作られ、その内側に不整形な深さ約10cmの掘り込みがあり、埋土中に木炭、焼土があるのでカマド址と推定される。床面に密着して出土した遺物はなくほとんどが埋土内に混在していたが、カマド址の塙内出土の土師器皿の破片は後述するSB4出土の破片と接合した。

**SB4** SB3の東約2mにあり、東西3m、南北3.1~3.3mの方形を呈し、掘り方は約15cmの小型住居址である。北辺と南辺の中央部が若干内窪し、北辺で東西約1mの範囲に幅18cm、深さ2~5cmの周溝が認められた。床面部の柱穴は2個あるが、そのうち西辺の1個は重複して建

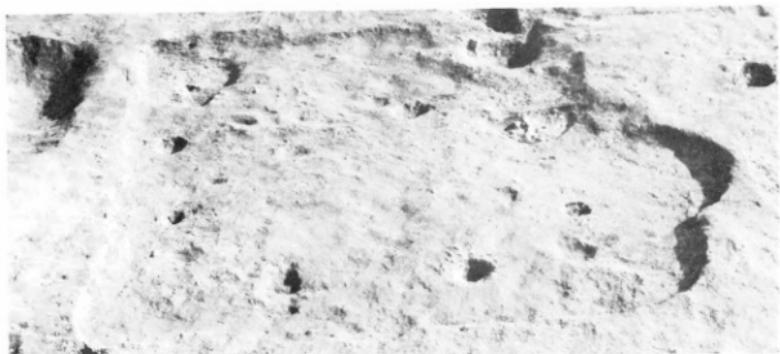
てられた掘立柱建物址(SB13)の梁行側柱であり、他の南西隅部の柱穴もSB4に伴うかは不明である。東辺の中央部の掘り方壁面に接して木炭、焼土の薄い集積が認められカマド址と推定されるが、下部は平坦で床面に接している。このほか東南隅部の壁面に接してほぼ長方形のピットがあるが、重複する掘立柱建物址の桁行柱である。以上のごとくSB4は床面に明瞭な柱穴を確認しなかったが、四辺の壁面に沿って直径約10~15cm、深さ約5~10cmの小ピットが部分的に約20~30cm間隔で認められ、これらは壁体の支柱である。さらに掘り方の四辺に沿って軒の支柱列として直径約20cm、深さ約10cmの柱穴が並ぶが、掘り方の肩から約20~50cmの間隔を保ち、柱穴相互の間隔は一定していない。なお、床面に密着し



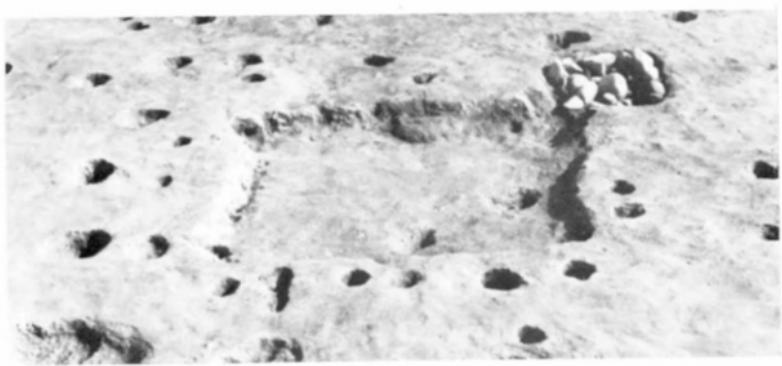
SB2・SB4実測図(1:60)



S B 1 (西より)



S B 2 (西より)



S B 4 (西より)

た遺物はなく、埋土の黒褐色砂質土に少量の土器片が混在する。

**S B 5** S B 4 の南にあり、西辺は調査地域外にあるが、東西の現長約3.5m、南北3m、掘り方約10cmの東西方向の長方形である。掘り方の三辺は共に不整形であり、東南隅部は土塙と重複しているが、東辺の中央部南寄りに南北約30cm、幅30cmの範囲の張り出しが作られ木炭、焼土が若干遺存するのでカマド址と推定される。床面に密着した遺物は全くなく、埋土の黒褐色砂質土に混在して少量の土器片が出土している。

**S B 6** S B 2 の東北方約9mにあり、北辺と西辺の一部を確認したに留まる。方形の住居址と推定され、西辺の掘り方は約12cmで、確認した床面の範囲内では木炭、焼土の集積は認められず、住居址に伴う柱穴も明瞭でない。床面に密着した遺物は全くなく、埋土内にも土器小片が散在するのみである。

**S B 7** S B 4 の東方約15mにあり、北辺と西辺の一部は削平されていたが、東西約5m、南北約5.5mの不整な方形を呈し、掘り方は約10cmである。東辺の中央部に南北約4m、幅約1mの張り出しが作られているが、出入口の施設と推定される。床面は北から南へ緩傾斜し、柱穴は周



遺構平面図 (1:300)

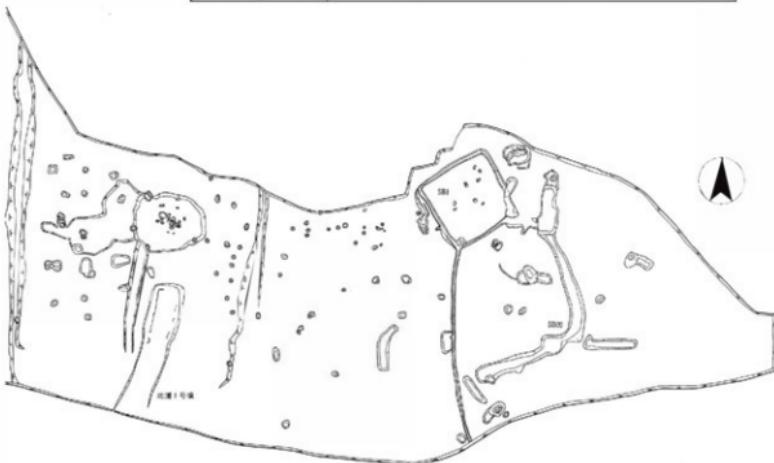
辺に沿って掘うものが4個あり、それぞれ直径約15cm、深さ約20cmである。床面内の他の柱穴はこの住居址に伴うものかは不明である。なお、東南隅部に一辺約40cm、深さ約30cmの長方形ピットがあり、貯蔵塙かもしだれないが塙内には全く遺物は認められない。床面に密着した遺物はなく、

豊穴住居址の規模

| 名 称<br>(SB) | 規 模 (m) |         | 面 積 (m) | 南 北 軸  | カマド位置 | 備 考                |
|-------------|---------|---------|---------|--------|-------|--------------------|
|             | 東 西     | 南 北     |         |        |       |                    |
| 1           | 5.0     | 4.9     | 24.50   | N 28°W | —     | 周溝、貯蔵塙             |
| 2           | 4.6     | 3.7~4.1 | 18.86   | N 15°W | —     | 排水溝                |
| 3           | —       | 4.3     | —       | —      | 東北    |                    |
| 4           | 3.0     | 3.1~3.3 | 9.90    | N 0°   | 東     | 東辺の一部に周溝<br>周辺に支柱穴 |
| 5           | (3.5)   | 3.0     | 10.50   | N 10°W | 東     |                    |
| 6           | —       | —       | —       | N 15°E | —     |                    |
| 7           | 5.0     | 5.7     | 27.50   | N 22°W | —     | 貯蔵塙か               |

時代別遺構対照表

| 時 代           | 遺 構 名 称                               |
|---------------|---------------------------------------|
| 弥 生 時 代       | S B 1                                 |
| 古 墳 時 代       | 北浦1号墳                                 |
| 奈 良 ~ 平 安 時 代 | S B 2.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15 |
| 鎌倉 ~ 室町 時 代   | S X16.17.18. S K19                    |
| 不 明           | S D21                                 |



埋土に混在した土器も小片のみで時期は不明であるが一応ここに含めた。

#### 掘立柱建物址

S B 8 調査地区の北西隅部で確認した南北2間(4.2m)×東西3間(6.15m)のもので、円形の柱穴は径30~50cm、深さ約20cmである。柱間のうち桁行は北側と南側で若干相違し、北側中央部は1.95m、両側は2.1mで、南側では2.1mの等間である。梁間は2.1mの等間である。柱穴のうち梁間東側列と梁間西側北第1柱を除き、すべて近接した別の柱穴を確認したが、床束または建て替え時の柱穴と推定される。棟方向は磁北に対して85°東に偏っている。

S B 9 S B 8 に重複する南北2間(3.2m)×東西2間(4.2m)のもので、東側柱穴はやや方形を呈するが他は円形で、径30~50cm、深さ約15cmである。桁行は2.1mの等間で、梁行は東側で1.6mの等間であるが、南西隅部の柱穴は確認できず残存部で1.8mと不揃いである。なお、中央部の東西の柱穴は妻柱の延長線上に認められるので、床束とみれば倉庫の可能性もある。棟方向はS B 8 とはほぼ同じである。

S B 10 S B 8・9 と重複するもので南北3間(5.1m)×東西2間(3.8m)と推定されるが妻柱は確認できなかった。桁行は1.7mの等間であるが、梁行は1.9mの等間と推定される。柱穴はほぼ方形と思われ径60cm、深さ約20cmである。棟方向は磁北に対して5°西に偏っている。

S B 11 S B 10 の東約3mにあり、南北3間(5.1m)×東西2間(3.8m)のもので、方形の柱穴は40~60cm、深さ約25cmであり、梁行南側の妻柱のみやや小型の柱穴である。桁行は1.7mの等間で、梁行は北側の妻柱は確認できなかったが南側で1.9mの等間である。棟方向はS B 10 とはほぼ同じである。

S B 12 S B 11 に重複する南北2間(3.7m)×東西3間(6.3m)のもので、方形の柱穴は径50~70cm、深さ約25cmで確認した掘立柱建物址のうちで柱穴が最大である。桁行はほぼ2.1mの等間であるが、南側列は中央部で僅かに狭く2.0mである。梁間は1.85mの等間である。棟方向は磁北に



S B 8 (西より)

対し89°西へ偏っている。

S B 13 積穴住居址のS B 4に重複する南北3間(3.9m)×東西4間(5.25m)のもので、S B 4と重複する部分の柱穴は明確でない。構円形の柱穴は径40~50cm、深さ約30cmである。桁行は1.1~1.5mと不揃いで、梁行も1.3~1.6mと一定しない。北側桁行の西から二番目の柱穴内に内黒の黒色土器楕の小片が出土し南側桁行の東から二番目の柱穴からは表面に細かい方形の格子目状の叩目をもち、裏面に細かい同心円文をていねいにすり消した須恵器壺の胴部片が出土している。棟方向は磁北に対し86°西へ偏っている。

S B 14 南北2間(4.2m)×東西3間(5.4m)のもので、方形の柱穴は径50~60cm、深さ約15cmである。桁行は1.8の等間で、梁行もほぼ2.1mの等間である。棟方向は磁北に対し83°東へ偏っている。

S B 15 南北3間(5.0m)×東西2間(3.6m)のもので、円形の柱穴は径30~50cm、深さ約15cmである。桁行は東側と西側は不揃いで1.5~2.0mと一定しないが、梁行は1.8mの等間である。棟方向は磁北に対し4°東へ偏っている。

#### 掘立柱建物址の規模

| 名 称<br>(S B) | 規 模 様 | 桁 行(m) | 梁 行(m) | 面 積 (m) | 棟 方 向   | 柱 間 (m)             |         |
|--------------|-------|--------|--------|---------|---------|---------------------|---------|
|              |       |        |        |         |         | 桁 行                 | 梁 行     |
| 8            | 3 × 2 | 6.15   | 4.2    | 25.83   | N 85° E | 2.1+1.95+2.1<br>2.1 | 2.1     |
| 9            | 2 × 2 | 4.2    | 3.2    | 13.44   | N 85° E | 2.1                 | 1.6~1.8 |
| 10           | 3 × 2 | 5.1    | 3.8    | 19.38   | N 5° W  | 1.7                 | 1.9     |
| 11           | 3 × 2 | 5.1    | 3.8    | 19.38   | N 5° W  | 1.7                 | 1.9     |
| 12           | 3 × 2 | 6.3    | 3.7    | 23.31   | N 89° W | 2.1+2.0+2.1<br>2.1  | 1.85    |
| 13           | 4 × 3 | 5.25   | 3.9    | 20.48   | N 86° W | 1.1~1.5             | 1.3~1.6 |
| 14           | 3 × 2 | 5.4    | 4.2    | 22.68   | N 83° E | 1.8                 | 2.1     |
| 15           | 3 × 2 | 5.0    | 3.6    | 18.00   | N 4° E  | 1.5~2.0             | 1.8     |

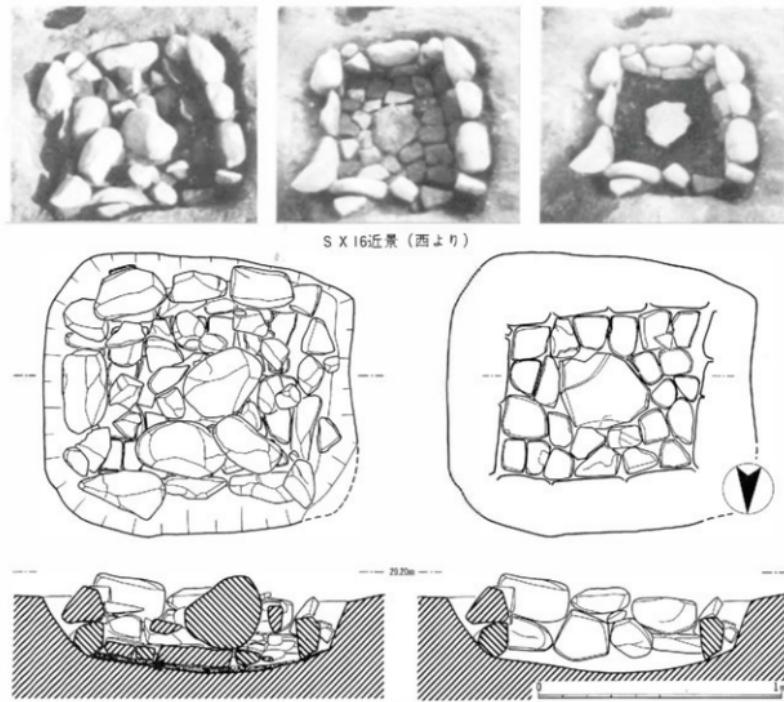
#### (3) 鎌倉~室町時代の遺構

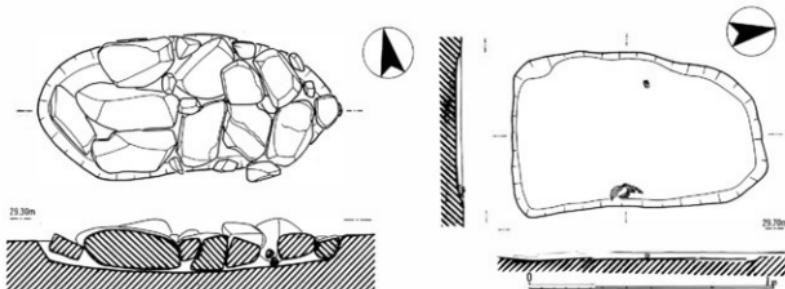
##### 墓地址

S X 16 S B 4の東南隅部を切ったもので、東西1.26m、南北1.16m、深さ32cmの隅丸長方形の土塙であるが、長辺は西側で若干すぼまっている。塙底は中央部が最も深く、塙底に厚さ約3cmの黒く汚れた砂混り粘質土が一面に堆積するが、炭化物は認められない。土塙内壁に沿って長さ20~30cmの河原石を横位二段に積み重ねて小石室を作るが、平面は東西の両側がやや北へ振れた菱形を呈している。二段積の側壁面はほぼ垂直で、塙底からの高さは平均25~30cmあり、側壁の一部は土塙を検出した地山面よりも上位にある。平面菱形の側壁内側に接して、長さ10~15cm、厚さ5~7cmの扁平な河原石をほぼ水平に敷きつめているが、中央部に30~37cmの大型の扁平山

石をすえている。

この敷石の下部と埴底までの間には上述の薄い粘質土層の堆積がみられたため、中央部の大型平石は藏骨器等を置くための台石と推定された。敷石面とその間の埋土には、木炭が全体にわたって薄くつまっているが、この敷石面で火葬した痕跡は全く認められない。敷石間とその上面の遺物としては、大型平石の北西部で山茶椀破片二個が出土したのみであるが、一個体のものであり、さらに上部の埋石間の黒褐色土層中から出土した破片も全て接合できたので、山茶椀一点が供獻されたものと思われる。敷石は石室の底部を形成したものであるが、その上部には同様の河原石を約30個乱雑に積み込んでおり、敷石中央の大型平石の直上には径30cmの大型の円石があたかも標石のごとく置かれていた。この大型石の頂部は、土壇の掘り方上面よりさらに8cm上方に達していた。石室内の河原石の充填土は黒褐色土の単純層で若干の炭化物を含むほか、人骨などは全く確認されなかった。なお、これら石室と土壇の上部を覆う埋土は全く認められないが、後世の耕作等により削平されたものである。山茶椀が供獻的に副葬されたものか、陶製藏骨器の覆蓋に用いられたかは判然としない。なお、他に土器片が全く出土しなかったので、藏骨器を用いたものならば木製容器であったかもしれない。





S X17実測図 (1:20)

S X18実測図 (1:20)

S X17 長さ1.25m、幅56cm、深さ約16cmの長軸をほぼ東西に向けた船底型の土塚で、内部に最大長辺約40~45cmの大型河原石が埋められていたのみで、他の遺物は全く出土しなかった。埋土は暗茶黒色砂質土の単純層で、全体に木炭片が多く包含しているが、塚底や河原石上面で火葬の痕跡は認められず、人骨も検出されなかった。河原石は一段のみであり、土塚の長辺に沿う方向で中央部に向って内傾するので当初は土塚内部に遺体が埋葬されていたと推定できないでもない。盛上が認められることや遺物の出土が皆無のため墓地址とは速断できないが、いちおう墓地址と推定しておきたい。

S X18 耕作のためほとんど削平されていたが、ほぼ長さ1.05m、幅64cm、現高3cmのほぼ長軸を南北に向けた方形状土塚である。南辺はほぼ原形の一部を保つものと思われるが、北辺は相当攪乱を受けている。塚底はほとんど水平で、全体に炭化木片と灰白色化したもうろい火葬骨片が散在しており、土塚底部に火熱を受けた個所が認められるので火葬後直ちに埋土で覆ったものと思われる。遺物は西辺の中央に接して土師器杯(28)1点のほか、東辺中央のやや内側の塚底直上に腐蝕の進んだ銅錢6枚が出土したのみで、供獻用のものである。

S K19 S X17の北側約6mにある不整形円形の土塚で、径1.2×1.6m、深さ約30cmである。塚内からは少量の鎌倉時代の山茶椀片、土師器鍋破片が出土しているのみである。この他、不整形の小土塚やピットは全域に散在するが、出土遺物はない。

#### (4) 時期不明の遺構

S D20 調査地区の東端にあり、SB1の東南側にあたかもそのSB1を囲む位置にある逆L字形の溝址である。幅約60~120cm、深さ約10~25cmと一定しない断面U字形のもので、東西約7m、南北約7mである。南北側の北端は土塚で切られているが、その延長部はSB1の東南隅部へ延長していくかに見えるが明確でない。溝内は黒褐色砂質土の単純層で、遺物が皆無のため時期は不明であるが、SB1の外側を画する意図をもった溝か、方形周溝墓であるのかは判断が難しい。なお、この溝址の周辺にも大小の土塚を検出したが、遺物は全く出土していない。

#### 2. 遺 物

出土遺物は、整理箱で約10箱と調査面積の割には少量である。弥生土器、須恵器、土師器、黑

色土器、山茶椀など各時代の土器であるが大半が破片である。この他、墓地址から銅錢が出土している。

#### (1) 弥生時代後期の遺物

S B 1 の床面上と貯蔵塙から出土しているが、後者は細片で図示できない。

**高杯（1）** ゆるやかに外反する口径30.4cmの杯部破片で、口唇部が角状をなし厚さは0.6cmで、下部は欠失するが、段をなす浅い杯部である。口唇部と、段の接合部のみ横なでで、他は内外面ともていねいに縦位でヘラ磨きしている。赤茶褐色で焼成良好である。

**高杯（2）** 口径21.2cm。杯部が段状の形式で、短い口縁部はするどく外反し、円板充填による脚部は垂直気味で、その外面に6条の擗描沈線が残る。図上で復元したほど遺存状態が悪く、調整は不明である。

**壺（3）** 口径5.2cm。口縁部が大きく外反し、端部は肥厚して稜をもち、外面は僅かに凹状となる。粗砂を多く含み、茶褐色である。

#### (2) 奈良～平安時代の遺物

竪穴住居址(S B 2～7)の床面上と同堆積土層中および柱穴出土の遺物で、須恵器、土師器、黒色土器がある。

#### S B 2 出土遺物

##### ○須恵器

**皿（4）** 口径14.9cm、高さ1.3cm。口縁部は段をなして直線的に外反し、天井部の中央に粗い同心円文の叩目がある。天井部は右廻りでヘラ削りし、内面はなでつけられている。小石を含むが精良土で、焼成良好である。

##### ○土師器

**甕（5）** 口径約16cmの破片である。口縁部は「く」字状に強く外反し、端部は内反気味につまみ出す。胴部外面に粗い拂目があり、他は内外面とも横なでである。精良土を用い、淡褐色である。

**甕（6）** 口径約21.8cmの胴長甕である。口縁部は「く」字状に強く外反し、端部付近で僅かに肥厚し、端部は面をつくり稜がみられる。胴部に刷毛目があったと思われるが、全体に剥落している。淡茶色。

**杯（7）** 口径15.8cm、高さ約3.9cm。底部外面は指押えのままで、内外面は付煤している。暗茶褐色。

**杯（8）** 口径約14.5cm、高さ約4.0cm。全体に剥落しており調整は不明である。胎土に小石を含み、暗灰褐色である。

**杯（9）** 口径約11.6cm、高さ3.8cm。口縁部はゆるやかに外反し、横なでにより僅かに屈曲する。全体に剥落しており調整は不明であるが、底部に付煤する。胎土は精良で、茶橙褐色である。

#### S B 3 出土遺物

##### ○須恵器

杯（10） 底径12.8cm。高台は短く底部の外側に付き、底部外面はヘラ削りし、外面の下半はヘラで小さく削っている。焼成良好。

杯（11） 底径8.3cm。高台は（18）と同様で、底部外面は右廻りのペラ削りである。砂粒を含み、内面は灰白色である。

#### ○土師器

甌（12） 口径20.9cm、現高約5cm。口唇部が尖る薄手の甌で、全体に剥落が著しい。淡橙色。なお、この他に甌、把手付鍋の破片も出土している。

### S B 4 出土遺物

#### ○土師器

甌（13） 口径14.9cm、現高約4.8cm。口縁部は「く」字状に強く外反し、端部はやや肥厚する。外面に細かい刷毛目が残る。外面に付煤し、灰茶褐色である。

皿（14） 口径17.4cm、高さ3.0cm。底部外面は指押えのあと、全体にヘラ研きし、その周縁に狭いヘラ削りがめぐる。胎土は緻密で、焼成良好であり、内面に付煤する。赤褐色。なお、当土器はS B 3 のカマド出土の破片と接合した。

杯（15） 口径16.3cm、高さ4.3cm。口縁部のやや長い杯で、外面は指押えのあと横なでし僅かにヘラ磨きの痕跡があり、口縁部内面にも右下りの暗文がかすかに認められる。胎土は精良で、橙褐色である。

### S B 5 出土遺物

#### ○須恵器

蓋杯（16） 口径16.7cm、現高約2.9cm。宝珠つまみは欠失しているが、口縁端部の短く内折する形式で、ヘラ削りはない。灰白色。

杯（17） 底径12.5cm。高台は短く底部の外側に付き、底部外面はヘラ切りのままである。

#### ○土師器

皿（18） 口径20.0cm、高さ3.5cm。口縁部の内外面は横なでし、底部外面の屈折部は右廻りでヘラ削りするが、全面に及んでいるかは剥落のため不明である。胎土に小石を含み、淡橙色である。なお、底部外面に黒斑が認められる。

皿（19） 口径約19.8cm、高さ約2.2cm。口縁部が短く内寄し、壠部は水平の面をなしている。全体に剥落が著しく、茶褐色である。

### （3） 鎌倉～室町時代の遺物

### S X 18 出土遺物

杯（20） 口径14.6cm、高さ約3.4cm。薄い底部からゆるやかに内寄する土師器杯で、口縁部は若干厚い。胎土に小石を含み、暗灰白色で、剥落のため調整は不明である。なお、付煤の痕跡はない。

貨幣 6枚が密着し綠錆が吹き出し、保存状態は不良である。うち1枚は「元豐通宝」（初鑄1078年）で、直径は2.4cmである。

## S X16出土遺物

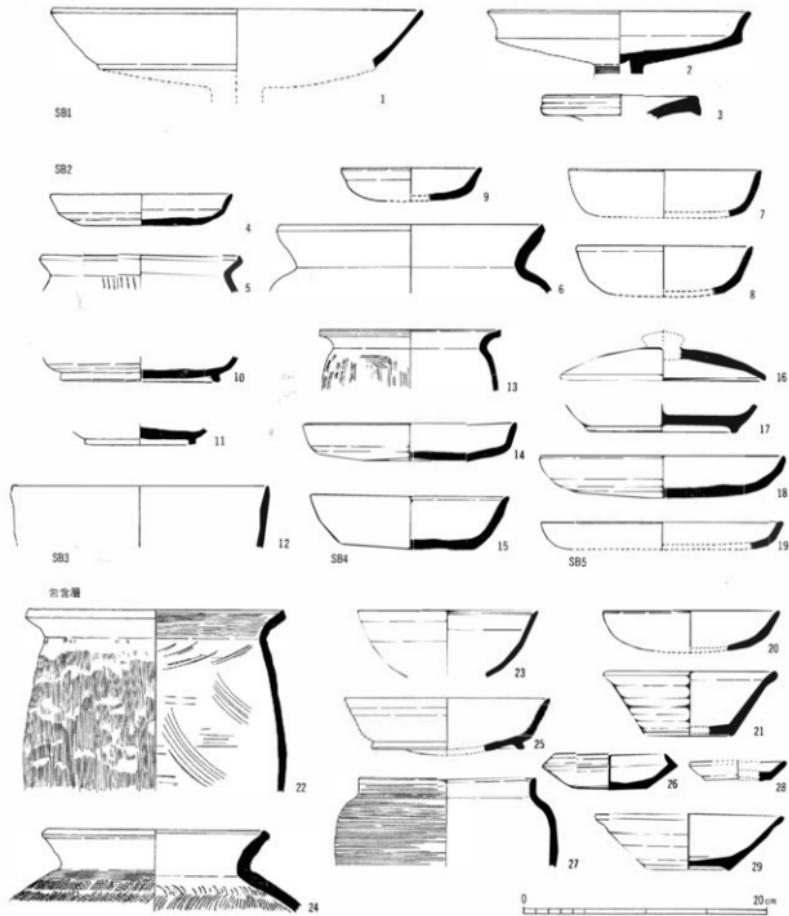
山茶椀（21） 口径14.0cm、高さ5.3cm。直線的に外反する胸部からさらに口縁部は短く外反し、端部はやや肥厚する。高台の断面は台形で短く、モミ痕はない。

## (4) 包含層の遺物

## ○土師器

甕（22） 口径約21cm、現高14.8cm、口縁部は「く」字状に強く外反し、端部は上方へつまみ出している。口縁部の内外面は横なでし、胸部外面は縦位の細かい刷毛目で、内面は刷毛目が粗い。

椀（23） 口径14.8cm、現高5.5cm。内面全体と口縁部外面が焼されて黒色化した内黒土器である。口縁端部を短くつまみ出し、内側にかすかに沈線が認められる。全体にていねいに研磨している。



○須恵器

甕 (24) 口径17.8cm、現高6.6cm。口縁端部が丸く肥厚し、胴部外面は平行叩目文の上を横撫し、内面は細かい同心円文の叩目がのこる。焼成良好で、灰白色である。

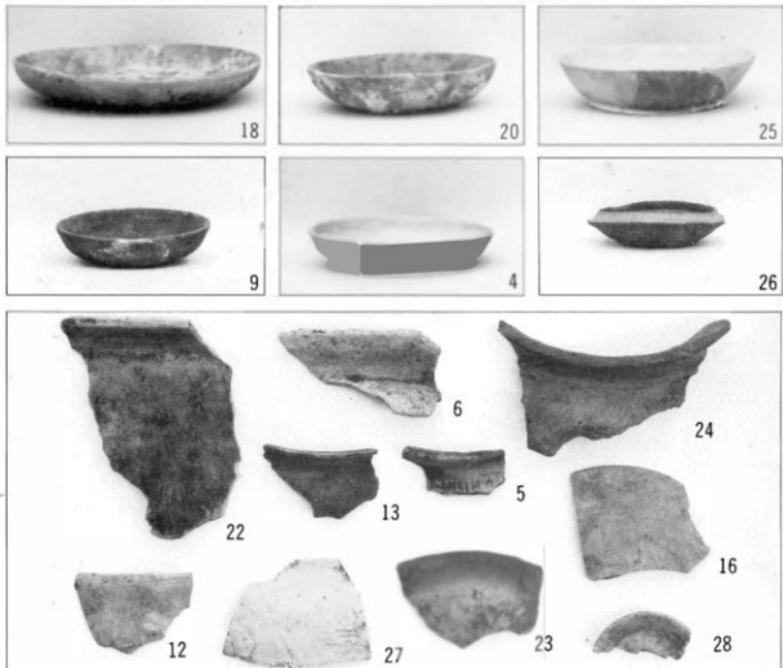
杯 (25) 口径16.8cm、高さ4.7cm。口縁部はゆるやかに外反し、台形の高台は底部の外側に付く。

杯 (26) 口径9.0cm、高さ2.8cm。口縁部の立ち上がりが短く、全体に退化形式の小型杯で、底部はヘラ切りのあとをていねいになでつけ、内面の中央部は横なでしている。焼成良好で、灰青色である。

壺 (27) 口径14.6cm、現高7.3cm。短く直立する口縁部の端はやや内折氣味に面をなし、外反する肩部は上方にある。外部全体に横位の細かいカキ目があり、内面は横なでする。胎土に小石を含むが精良土で、焼成はやや悪く白灰色である。

山茶椀 (28) 口径15.5cm、高さ4.5cm。やや内窵氣味の胴部からゆるやかに外反する口縁部からなり、端部は丸味を持つ。高台は低い台形で、モミ痕が付く。

山皿 (29) 口径7.8cm、高さ1.5cm。厚手の小型皿で、口縁部は直線的に外反し、底部中央はやや凹状を呈する。



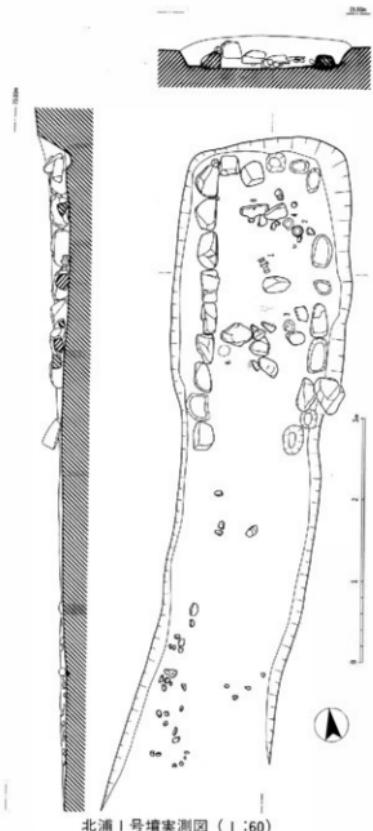
出土遺物 上段約1:4 下段約1:3

## IV 北浦1号墳の調査

### 1. 内部主体

弥生時代後期の豊穴住居址(SB1)の南西約16mで確認したもので、南側に開口する横穴式石室である。玄室部の西側壁が耕作土中に露出し、近年の畑境の石垣と重複する部分もあったが、墳丘の盛土や周溝は全く認められない。石室の長軸はN10°Eを指し、側壁は最下段のみを玄室部で確認した。掘り方の全長は8.30mで、長方形の玄室部は長さ3.40m、同幅2.20m、羨道部幅は1.75mである。羨道は玄室に対して僅かに西へ偏って作られ、玄室部の南端はややすばり両袖式の平面を呈している。掘り方は玄室奥壁部で最も高く約40cmあり、南に向うにつれて次第に低くなり羨道では10cm前後となることから墳丘とともに耕作等で削平されたものである。

玄室の西側壁は残存するが、奥壁と東側壁の大半は攪乱を受け抜き穴がある。これらの側壁は



北浦1号墳実測図 (1:60)

長さ30~40cmの河原石を横にすえ、西側列は中央部で掘り方の下端から北へ約45cmの付近で内壁面をほぼ直線に揃え、東側壁は奥壁から南へ約3.1mまでで中央はやや外窓し、掘り方下端から南へ約30cmの付近で面を揃えている。東側の袖石は抜かれているが側壁から約15cm内側に位置し、西側でも僅かに東に寄せて袖部を形成しており、掘り方の平面からみても両袖式である。玄室は長さ3.10m、幅約1.15m、面積約3.6m<sup>2</sup>で、羨道幅は基部で約85cmである。羨道部の側壁は残存せず、抜き穴も無いため地山面に石を直接置いたものかもしれないが、築造当初の側壁の有無は不明である。なお、羨道の床面には河原石が僅かに認められたが、地山のものかもしれない。

玄室の床面には敷石面ではなく、大小の河原石が散在するのみであるが、中央の一群については上面が平坦に揃うので棺台として用いられた可能性もある。おそらく、被葬者は一体であろう。

遺物は玄室のみで出土したが、須恵器台付壺だけが床面に密着していたほかは全て床面より5~10cm浮いた状態で埋土の黒褐色砂質

土から出土し、須恵器杯、同蓋杯、土師器椀、金環があるのみである。

金環(8)は、奥壁部に近い中央東寄りの大型河原石の下部で出土したもので1点のみである。

須恵器台付細頸壺(1)は、玄室中央部で口縁部を南に向けて横に倒れた状態であった。須恵器杯身(4)は、金環より約40cm東南で検出したもので、正位を保っているが、口縁部破片の一部は南側約20cmに移動していた。須恵器蓋杯(2)は、杯身(4)の東南に接して逆転して出土したもので、おそらく両者はセットとして副葬されたものであろう。須恵器蓋杯(3)は、台付細頸壺の南方約65cmにあり、正位を保っているが破損していた。土師器椀(6)は、西側壁石の南から4個目の内側付近で清掃中出土したもので、正確な位置は不明であるが、正位を保ち破損していた。このほか須恵器杯身(5)と土師器椀(7)の二点は、(6)の東側から出土したが正確な位置は不明である。

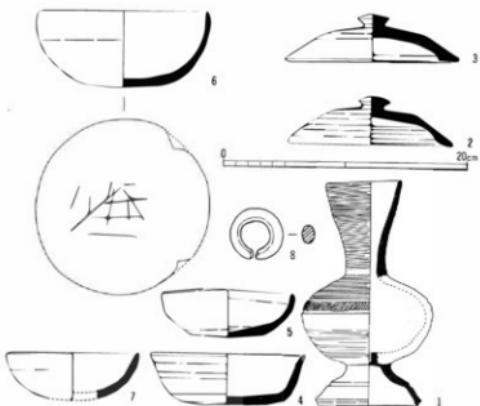
## 2. 遺 物

### ○須恵器

台付細頸壺(1) 口径6.1cm、高さ18.4cm、底径8.2cmの完形である。細くしまった頸部からゆるやかに内寄して立ちあがる口縁部とそろばん玉型の胴部を持つ壺に、低目の段状の台を付けている。口縁上部と胴部に二条の太いヘラ彫沈線を施し、胴部の上段の直線から上方に細かいカキ目による沈線がめぐり、胴部の下方にも同様の右廻りのカキ目があり、胴部の沈線間には櫛目圧痕がめぐる。台の段直下にも太い沈線がめぐり、台脚の端部はやや内傾気味に直立する。胎土に小石を多く含むが、焼成は良好である。

蓋杯(2) 口径13.4cm、高さ4cm。内面のカエリが短く優少化した形式で、宝珠形つまみも扁平である。天井部のみヘラ削りし、内面中央はていねいになでつけられている。カエリの端部に、使用時の破損と思える細かい剥落が多い。胎土は小石を含むが焼成良好で、外面全体に灰緑色の自然釉がかかる。

蓋杯(3) 口径14cm、高さ3.9cm。内面のカエリは(2)と比較して僅かに長いが口縁端部より僅かに内側にあり、扁平な宝珠形つまみもやや高く菱形に近い。外面も下方でゆるやかな段を呈し、形式的に(2)よりもやや先行するものである。天井部のヘラ削りは右廻りで、内面中央はやや広範囲にていねいになでつけられている。胎土に小石を含むが焼成良好である。



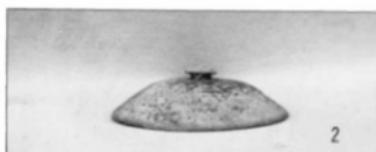
出土遺物実測図 (1:4、8は1:2)



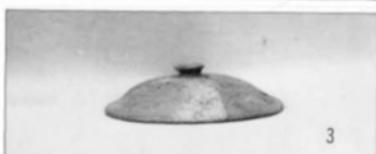
石室全景（東より）



石室近景（西より）



2



3



4



5



6



7



1



8

出土遺物（1は1:3、2～7は約1:4、8は1:1）

**杯身（4）** 口径12.5cm、高さ4.2cm。口縁部はゆるやかに外反し、端部はさらに外延して丸味をもつ。底部は全体に右廻りでヘラ削りする。内面中央はていねいになでつけられている。胎土に小石を含むが、焼成良好である。

**杯身（5）** 口径10.6cm、高さ4cm。口縁部がゆるやかに内窵し、端部が丸味をもつ小型品である。底部はヘラ切り調整の後になでつけしており、内面中央は幅4.5cmのなでつけがある。形式的に（4）よりもやや先行する。胎土は精良で、焼成良好である。

#### ○土師器

**椀（6）** 口径13.9cm、高さ6.3cm。丸味をもった底部から大きく内窵する口縁部からなり、端部は丸く、底部に葉脈状の細いヘラ描き文様がある。全体に剥落が多く調整は不明である。胎土に砂粒を多く含むが焼成良好で、橙褐色である。

**椀（7）** 口径10.7cm、高さ約3.9cm。口縁部はゆるやかに内窵し、端部は僅かに尖る。全体になでつけられて器面は滑らかである。胎土は精良土で焼成も良好で、淡茶褐色である。

**金環（8）** 直径2.2cm、環厚0.5~0.7cm。銅芯金メッキ製で、耳朶掉入部が僅かに剥落するが遺存状態の良好なものである。

## V 結 語

今回の調査の結果、北浦遺跡は弥生時代後期から中世に至る複合遺跡であることが明確になった。以下簡単に要点をまとめて結語としたい。

安濃川流域における弥生時代後期の集落は、自然堤防上や谷水田を望む台地上に立地する傾向があり、中期以前の拠点的集落の解体に伴う分村の結果であることは既に指摘されている。<sup>①</sup> S B 1 も僅か1棟にすぎないが、おそらくこの台地の東側斜面にかけて数棟の住居址からなる「単位集団」の一部として存在したことが推定される。同様の立地条件は、安濃川両岸に面した台地の全てにあてはめることができるのであり、一台地に各単位集団ごとの領域を保有しながら、台地の下方にひらける低地を主要な可耕地とし、さらに台地部の畠地を開墾することによって経営されたものであろう。古墳時代以降も基本的には前代の生産基盤を継承しながら徐々に開拓が進展し、5世紀中葉にはそうした周辺の集落群を統合した在地首長の登場が、当遺跡の北西に位置する明合古墳の築造背景になったものと推定される。

一方、古墳時代中期から後期を通じて、安濃川流域に比較の方墳が多いという指摘は、この地域が一貫して在地勢力の残存が認められたことと呼応している可能性が強いものと思われる。6世紀の後半以降爆発的に増加する群集墳の築造の派及は、県内でも有数の群集墳として当遺跡の西南約3kmにあたる長谷山々麓の横穴式石室群にも認められるが、その大半は7世紀前葉に築造のピークが認められる。こうした趨勢の中で、北浦1号墳は副葬土器からみる限り須恵器杯・蓋杯に僅かな形式差が認められるが、ほぼ7世紀前葉から中葉頃に比定され、長谷山古墳群の造営時期と期を一にしている。県下の同時代のいわゆる終末期古墳は、内部主体が1~2基からなる

木棺直葬例が多く、そのうち单葬例が大半を占めており、横穴式石室の場合は全てこの時期の遺物は追葬時のものである。北浦1号墳の場合、出土の土器に僅かな形式差が認められるので追葬の可能性を全て捨て去ることはできないが、この時期にもなお横穴式石室を築造する在地集団の勢力をいちがいに後進性のみで把握しきるには他の類例の増加を俟たなければならないであろう。

こうした変遷を経て、この台地上に奈良時代以降に再び集落が営まれるに至るが、土器の形式からみて8世紀中葉から後葉に竪穴住居址群の時期を比定することができる。おそらくこの時期の集落は調査地域の西側一帯にもひろがることが予測され、10~20棟からなる竪穴住居址群がひとつまとまりを形成していたことが推定されるのである。6棟の竪穴住居址群は全て方形ではほぼ併存し、相互に関連していたことはSB3とSB4の埋土から出土した土師器皿の破片が接合した事実からもほぼ肯けよう。こうしたことは血縁や地縁に基く紐帶が住居相互に存在したことを意味するとともに、時期不明のSB7を除外すれば当遺跡の竪穴住居址群中に特に大型例が認められないことから、相互がほぼ同質的な関係にあったことを推定させるのである。こうした中でSB4のごとき小型竪穴住居址の存在は、飛鳥・奈良時代以降に竪穴住居址が全般的に小型化する伊勢湾西岸地域の傾向として併存する掘立柱建物址に付属する建物ではないかと想定されている<sup>③</sup>。しかし、単に機能差を想定するのみでは充分説明しきれない点を持つようにも思われるが、将来の資料の増加に俟ちたい。

さて、竪穴住居址の構造からみると、SB4は掘り方周辺に小型の軒先支柱を持ち、他の住居址でもSB4のごとき明瞭さはないが同様の支柱穴と想定しうるもののが認められる。これらの構造を持つ例は、県下では智積庵寺址<sup>④</sup>、新野遺跡、西山遺跡、貝野遺跡、野垣内遺跡、高向遺跡などで確認されており、上述の竪穴住居址の小型化に伴う伊勢湾西岸地域における普遍的なあり方である。

掘立柱建物址は8棟を確認したが、それらの存続時期を明確にする資料は柱穴の埋土中に少量混在した土師器・須恵器・黒色土器の細片にすぎず、SB13の柱穴出土の黒色土器椀小片がこれら掘立柱建物址群の造営時期のおそらく下限の一端を示すのみである。この他、建物址として明確なまとまりをみせない柱穴のうち、方形柱穴の埋土から奈良時代の裏面に同心円文の叩き目を持つ須恵器片が出土していることなどから、一応存続時期を竪穴住居址と併存し、黒色土器などからみて平安時代前葉にかけて存続したものと比定したい。これらの掘立柱建物址群は、磁北に対する方位からみて二分され、基本的には二回の建替が行なわれているが、方位が一致するSB8・9・10は重複しており部分的には三回の建替が考えられる。また、8棟のうち柱間3間×2間が6棟を占め、4間×3間が1棟、2間×2間の倉庫址の可能性を持つものが1棟で、とともに廄は認められない。3間×2間の建物が本遺跡の基本的な規模であり、床面積も4間×3間の1棟を含めても20m<sup>2</sup>前後で、SB8の25.83m<sup>2</sup>が最も大型であるが全体的に同一規模である。

丘陵の西側に続く未調査地域の掘立柱建物址の存在を無視しないが、現状ではこれらの掘立柱建物址群は中心的な主要な大型建物址を含んでいない。未調査地域に大型建物址が存在する可

能性はあるものの、これらは大型建物址の周辺にあったものか、それとも同規模の建物址のみで構成されていたのかは速断しえない。

以上のこととは、前述の竪穴式住居址群にも比定できるのであるが、竪穴住居址群の場合はすぐなくとも7世紀中葉以降は小型化の傾向があるので、そうした趨勢の中で大型建物址が存在する可能性はすくないと思われる。したがって、こうした二つの異なる構造からなる古代集落址の場合竪穴から掘立柱への構造上の変換期が注目されるのであり、三重県下ではその上限を飛鳥～奈良時代にかけての7世紀中葉から8世紀前葉におくことはほぼ確実である。<sup>⑧</sup>

さて、「倭名類聚抄」によれば、古代律令制下の旧安濃郡下には8郷が存在し、そのうち北浦遺跡の位置する地域は村主郷に含まれたものと推定される。IIで述べたごとく旧村主郷には奈良時代から中世に至る大型集落址と想定される八幡前遺跡があり、また同遺跡の西方約100mに当る町道建設に伴う東觀音寺遺跡の試掘調査においても縁袖陶器が出土するなど、現在の安濃町大字村主・井上の一帯が旧村主郷の中心的集落であった可能性が強い。北浦遺跡は、この大字村主・井上の北方約1kmに位置しており、こうした地理的な環境からも旧村主郷の中心的集落となんらかの関連を持った一般集落として位置づけておきたい。この位置づけに誤りがなければ、主要建物が掘立柱建物に構造変換していく時期は、いわゆる官衙集落は奈良時代前葉までにその変換を終え、他の一般集落はそれらに若干後行していったと推定できるであろう。いずれにしても古代律令制度の貴徵が伊勢湾西岸地域の古代集落の建物構造に多大の影響を与えたことは誤りなく、今後は「集落構成」の変換期の把握と、集落間相互の格差を追求していくことに焦点を絞る必要があろう。

次に平安時代以降については、山茶椀や土師器鍋を含む土壙や柱穴が少數みられるとはいえ明確に集落址としての痕跡は認められなかったが、この台地上が再び利用されるのは鎌倉～室町時代に散在的な墓地としてである。3基の中世墓のうちS X 16・17には火葬痕跡は認められず、残るS X 18では火葬地即埋葬地という状況が認められた。とくに後者では副葬用の土師器杯1点と「元豊通宝」を含む6枚の銅錢が出土し、中世における六道銭供献の地方普及を物語る好資料である。<sup>⑨</sup> S X 16・17では火葬か土葬かは判断しえないが、こうした墓地のあり方は一定場所に限定して火葬骨等を陶製蔵骨器に埋納した大規模な中世墓とは様相を異にしている。いうまでもなく中世の墓制は、被葬者の階層や在地寺院の宗教活動に規制され多様な展開を示している。三重県下においても近年各地で多様な墓制が確認されているが、なお中世村落の基層を構成した民衆の墓制は明確でない。したがって、当遺跡で確認した簡素な中世墓が、その被葬者におそらく在地村落の構成員の下層部分を含んでいる可能性が強いことを指摘するにとどめたい。（伊藤久嗣）

註

① 伊藤光幸 「安芸郡安濃村辻の内遺跡」 『昭和50年度農業基盤整備事業地域理歴文化財調査報告』 安濃町教育委員会) 1975

② 吉村利男 「安濃川流域の古墳文化の特異性」 三重考古学研究会第15回例会(1975.7)の発表に依る。

- ③ 小玉道明 「西山遺跡・新野遺跡」 東員町教育委員会 1976
- ④ 小玉道明 「智積庵寺」 『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』 三重県教育委員会 1970
- ⑤ 林 博通 「貝戸遺跡」 四日市市教育委員会 1969
- ⑥ 伊勢市上地町所在、県営圃場整備事業により三重県教育委員会が1973年に事前調査実施
- ⑦ 伊藤久嗣 「高向C遺跡」 『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』 三重県教育委員会 1973
- ⑧ 池辺 瀬 「和名類聚抄郷名考證」 吉川弘文館 1966
- ⑨ 安濃町教育委員会が1973年調査
- ⑩ 上野市比自岐の馬場西遺跡で確認された円形の火葬土坑内に銅鏡6枚が出土している。山田猛 「上野市比自岐・馬場西遺跡」 『昭和52年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告3』 三重県教育委員会 1978